心に残る保育を

堀内康人

私事になりますが、私の母が死んでかれこれ十八年になりましょうか。六十の坂を越した私は、最近よく母の事を思い出します。私が幼少の頃、父は師範学校の教頭から新設の旧制中学校長に転出した頃でありました。その頃既に女四人男三人の兄弟姉妹でしたから、母親の家事労働は大変だったに違いありません。母も亦師範学校を出てしばらく小学校の訓導をしていたようです。子ども七人の世話を電気洗濯機も冷蔵庫もない時代にしていたのですから、毎日毎日が母にとっては火の車の様な生活であったにちがいないのですが、私は野山や河原であそびほうけていたので、別に母が転手古舞をして働く姿を目に浮べることは出来ません。ですが特に心に残ることを御紹介しながら、そのことと幼児教育と結びつけて見たいと思います。

イギリスの古い子どもの歌に〝桑畑をまわろ〟という歌があります。それは霜のおりた朝、子ども達が輪になって桑畑をまわり、歌い終ると一斉に桑畑に跳び込んで桑の実を食べるのですが、私共の子どもの頃も、そんな歌こそ唱いませんでしたが、七郎さんという餓飢大将が、桑の実を食べるぞと号令をかけるや畑に入って、口を真赤にしてむさぼる様に食べたものです。夕飯前にこうして桑の実を沢山食べてしまうと、今でいうデザートが先になる為、折角の夕飯のご馳走も食べられなくなり、そのことで良く母に叱られました。そんなことがあってから私があそびに行こうとしますと、桑の実のみのる頃には必ず桑の実を食べない約束をさせられました。でも夕飯前の桑の実はそれはそれはおいしくてつい約束を破り、それが見つかって、私は家の外に立たされ姉や弟の食事が終るまで待たされました。その時の母の厳然とした姿勢が今でも強く残っております。

昔はお菓子屋さんが大きな風呂敷に菓子の見本箱を包んで来て注文を取り歩いていたものですが、その菓子が配達されるのが待ち遠しかったものです。広いテーブルの前に坐らさ

れて、皿に分けられた大きな最中を私は二つペロリと平らげ、よちよち歩きの弟が手にあまるその大きな最中をゆっくり食べている所に近づき、兄ちゃんのお口にちょっと入れてごらんといったのです。弟が最中を差出したとたんぱくりとやったのはよかったのですが、弟の指をかんでしまったのです。さあ大変弟は火のついた様に泣き始めました。私は御免御免といいながら、歯の跡のついた弟の指を撫でています と、黙って私に近づいた母が〝弟の指まで食べたい食いしん坊〟といったかと思うと最中を私の口に二つも三つも押し込みました。私は息が出来ないで苦しんでいると姉が指を突込んで出してくれました。兄弟姉妹七人の洗濯物それを洗濯板を使ってやる母の姿を時々眺めて母さんは大変だなと思いました。母は私を井戸のポンプの所に立たせておいて、よごれた水を捨てると、〝はい水をだして〟と命ずるので私は何回もポンプをこがされました。時々じっとして立って待っているのがいやになり、逃げ出そうとすると、駄目です洗濯が終るまでお母さんのお手伝、待っている間に糸瓜(へちま)のなっているのを見ながら〝誰が風を見たでしょう、僕も貴女も見やしない〟を唱って下さい、するとお母さんのお洗濯も楽しくなります、と歌をよく唱わされたものです。私は五十数年たった今でもこの歌を唱うと、あの糸瓜棚、井戸端、ポンプその下で洗濯する母が一枚の絵の様に浮び上って来ます。九人家族の食事を切り盛りする母はベテラン調理士でありました。広い板の上で棒をまわしながらウドンを平らにして最後はトントンと幅の広い庖丁で切って仕度をする作業過程はよく観察していますので、こね方、粉のふりかけ方、伸ばし方、力の入れ具合まで思い出すことが出来ます。

私は時々、幼稚園や保育園にいって、先生が子どもを保育する姿勢を見ながら、この子たちはきっと先生のこの姿勢を一生涯心に残すことだろうと思ったときほっと救われた様な気持になります。砂遊びを終えた子ども達に、水洗い場にいて「ああ楽しかったね、さあバケツをきれいに洗って、まだきれいになりません、そうですきれいになりました、さあ棚にしまって下さい」、などと最後の子が道具を洗い、しまい終るまで根気強く身守っている先生を見ているとそんな気持になります。色々言いたいことが沢山ありましたが、私の母の事が多くなってしまって御免なさい。ではいつまでも子どもの心に残る保育をなさって下さい。

（東京家政大学）